アジア・アフリカ地域研究 第13-1号 2013年11月
Asian and African Area Studies, 13 (1): 66-94, 2013

フィールドワーク便り

キャッサバの種茎は銀行と同じだ

―ザンビア農村の生活世界―

原　将也*

2011年9月21日，ザンビア大統領選挙の投票日の翌日に，私は初めてアフリカ・ザンビアの大地に降り立った．ザンビアはおおらかで，親切な人が多くゆったりとした国だと聞いていたものの，空港から宿へ移動する間，私は周囲のなんともいえない緊張した雰囲気を感じていた．ザンビアは，期待と不安が入り混じった空気に包まれていた．ザンビアでは1991年に複数政党制が導入されて以来，長年にわたってMMD（複数政党制民主主義運動：Movement for Multiparty Democracy）が政権を握ってきた．そのためかアフリカのなかでは，比較的政治が安定している国だと称されてきた．しかし2006年の大統領選挙では，野党であるPF（愛国戦線：Patriotic Front）候補のマイケル・サタ氏が与党MMD候補のレヴィー・ムワナワサ大統領に迫り，政権交代が実現する一歩手前であった．今回の選挙では，PF候補のサタ氏が都市部の労働者を中心に支持を集め，政権交代が確実だとされていた．そして9月23日の未明，選挙結果が発表され，サタ新大統領が誕生した．偶然にも私は，20年にもわたってつづいたMMD政権に終止符が打たれ，ザンビアの新たな幕が開けた瞬間を人びとと共有することとなった．

私の調査地は，ザンビア北西部州ムフンブウェ県という首都ルサカから約800 kmも離れた遠隔地である．私が住みこみで調査している農村にはカオンデ，ルンダ，ルバレ，チョークウェ，ルチャジという民族の人びとがともに住んでいる．彼らは焼畑農耕を営みながら，漁撈や狩猟，採集も営んでいる．焼畑で栽培される主な作物は，自給用のモロコシとキャッサバである．カオンデ以外の人びとが，モロコシを栽培することはないが，キャッサバは多くの人びとによって栽培されている．焼畑のほかには，政府機関である食糧備蓄庁（FRA：Food Reserve Agency）から安価に販売される化学肥料を使用したトウモロコシ栽培が営まれており，多くの人びとはこのトウモロコシを食糧備蓄庁に販売することで現金を入手している．

政権が交代してから，このトウモロコシ栽培に変化が起きている．前年分の売上金がいつまで経っても支払われず，化学肥料は遅配

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科／日本学術振興会特別研究員（DC）

され，適切な施肥時期を過ぎてから届くようになったのである．「前政権のMMDのときには，11月には化学肥料が来て，施肥できたのに，今年（2011/2012年度）は1月に届いたよ．現政権のPFは農業政策に熱心じゃない」と私の住みこみ先のご主人ルーウィは，あきらめ顔で教えてくれた．1月といえば，トウモロコシの草丈は人の背丈と変わらない．本来ならばトウモロコシの草丈が，膝の高さと腰の高さのときの2回にわけて施肥する必要がある．

2011/2012年度には化学肥料の遅配のため，トウモロコシの収量が悪く，ルーウィは自給分しか収穫できず，食糧備蓄庁に出荷し，現金収入を得ることができなかった．化学肥料の遅配はザンビア国内においても問題にされており，ザンビアの大衆紙*The Post*には，化学肥料の遅配を皮肉した風刺画が掲載されるほどである．さらに2012/2013年度には，化学肥料の遅配のほかに，各地区に設けられていた集荷場所も減った．私の調査地には集荷場所が無くなり，人びとは10 kmも離れた隣の地区まで，重さが50 kgもあるトウモロコシの袋を何十袋も運ばなければならなくなった．そこでトラックを所有する人びとが，新たに運送業をはじめ，トウモロコシ1袋につき3クワチャ（約55円）で，隣の地区まで運ぶようになった．トラックの所有者にとっては新たな商機となったが，農民にとっては新たな経済的な負担となった．農民にとって重要な現金収入源であるトウモロコシの栽培が，立ち行かなくなりつつある．

新政権の方針は，鉱工業セクターの強化であり，国民の大部分が従事する農業セクターはないがしろにされつつある．先の大統領選でもPFを支持したのは都市部の労働者層であり，とくに銅鉱山や多くの工場が立地するコッパーベルト州を中心に，圧倒的な強さを誇っていた．一方，北西部州のように，農業が主産業である農村部ではMMDに票が集まった．村びとは口々にMMDの良さを語り，ときにはPFの政策を揶揄することもある．政権交代によってみずからの収入源が揺らぎ，村びとはこれからどのように農村で生活していくのだろうか．選挙直後にザンビア入りしたことで，私は農村における日常生活の視点から，ザンビアの政治動向について注目するようになった．

「キャッサバの種茎は銀行と同じだ．」この言葉は，ルーウィの口癖である．キャッサバは，30 cmほどに切りわけた茎を，地面に対して斜めに挿すことで植えつけられる（写真1）．この最初に植えつける30 cmほどの茎がキャッサバの種茎であり，キャッサバを種子から栽培することはない．植えつけ後2年から3年が経つと，キャッサバのイモが収

写真1　雨季の初め，キャッサバの種茎をマウンドに植えつける（2011年11月7日撮影）

穫されはじめる．イモの収穫時には，株ごと引き抜いてしまわず，肥大したイモだけを収穫し，土をかぶせて元の状態に戻す．植えつけ後 4 年以上が経過すると，イモが繊維質で固くなってしまうため，株ごと引き抜く．そのときの茎が，種茎として利用される．

村びとは日常生活のなかで，キャッサバをシマという練り粥にして食べている．シマはザンビアの一般的な主食であり，トウモロコシやモロコシ，シコクビエなどの穀物の粉から作られる．村における毎日の食事では，キャッサバのシマと葉菜の炒めもの，インゲンマメの煮物，ときに鶏肉やヤギ，ブタの肉がごちそうとして提供される．キャッサバのシマは，穀物から作ったシマと違い，わらびもちのような弾力がある．しかし発酵した特有の風味がするため，初めて食べる人には苦手な人が多く，ザンビア人でも好き嫌いが激しい．その風味の原因は，毒抜きの行程にある．キャッサバには，青酸配糖体として有毒成分が含まれているため，毒抜きをする必要がある．収穫後，生のイモを水に浸け，皮と芯を取り除くことで有毒成分を除去できる（写真 2）．暑い乾季であれば，収穫から毒抜き，日干し乾燥，製粉までの行程を 3 日間でおこなうことができるが，雨季では乾燥させるのに，火を用いるため，5 日ほどかかる（写真 3）．キャッサバのイモはシマだけでなく，生で食べたり，ゆでて食べたりすることができ，間食としても重宝されている．また葉は，おかずとして日常的に利用されている．キャッサバは食べるまでに手間がかかるが，村びとの生活にとって，欠かせない作物である．

写真 2　毒抜き後，キャッサバのイモの皮をむく．毒抜きから調理までの行程は，女性の仕事である（2012 年 6 月 24 日撮影）

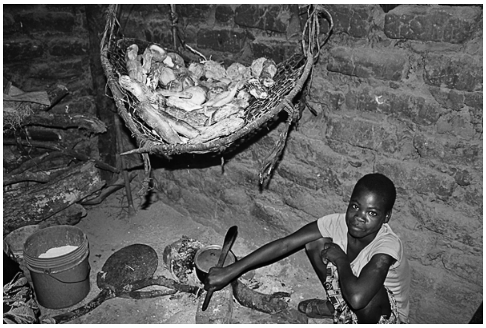

写真 3　皮をむいた後のキャッサバを，火のうえで乾燥させる．なかなか乾燥しない雨季の工夫である（2012 年 12 月 25 日撮影）

「キャッサバの種茎は銀行と同じだ」というのはどういう意味なのか．ある日，私はルーウィに聞いてみた．貯めておけて，いつでも増やせる．そして，必要なときに引き出すことができるからだと彼は私に説明した．キャッサバのイモは掘り取らなければ，何年も「貯める」ことができる．そして一度に収穫することなく，いつでも必要に応じて「引き出す」ことができるのである．植えつけの際には，茎を植えつけるだけで容易に「増や

す」ことができる．彼はキャッサバの種茎を「銀行」，イモを「財産」に見立てている．

ザンビアでは，1980年代後半から急激なインフレーションが進行した結果，通貨の価値は下がりつづけ，ザンビア政府は2013年1月1日にデノミネーションを実施し，10,000クワチャは新たに10クワチャとなった．ザンビアの銀行における預金金利は，1990年代後半には年率30%台，2000年代前半には年率20%台を推移した．ザンビア国内の経済状況は年々変化しつづけ，銀行や貨幣の価値は不安定な状況にある．このような不安定な社会情勢がつづくなかで，ルーウィはキャッサバの栽培に生活の安定を求め，みずからの生活を支えようとしている．彼が銀行の預金金利をつぶさに理解しているとは思えないが，銀行に預金するのと同様に，キャッサバのイモを畑で増やし，多く収穫しようと努めている．

ルーウィはキャッサバのイモを，必要に応じて引き出し，ときには種茎やイモを近親者に贈与することもある．村びとはキャッサバの安定性と多収性を十分に認識し，それをうまく利用しながら生活を営んでいる．2012/2013年度には，ルーウィは政権交代によって不安定になったトウモロコシ栽培を縮小する一方で，精力的にキャッサバ畑を開墾している．彼は，「いつどうなるかわからない不安定なトウモロコシ栽培よりも，キャッサバ栽培を中心にしたい」と強く語る．

私は選挙直後に渡航したことで，政権交代というマクロな国内政治の動きによって生じた社会の変化を，農村の生活を調査するなかで垣間見ることができた．政権交代という政治の動きによって生じた変化に対して，村びとはみずからの生活基盤を変えることなく，状況に応じて対処する．ルーウィはキャッサバ栽培を拡大することで，みずからの生活に安定をもたらそうとしている．社会や経済システムが激動するアフリカにおいて，生活を安定させようとする彼らの生きる力には，いつも驚かされる．

不安定な状況にあるにもかかわらず，村びとの普段の生活は，とても平穏である．私が調査のため村で生活していると，退屈で仕方がないときがしばしばある．毎日が平穏すぎて「もう村にいたくない．早く日本に帰りたい」と思うこともよくある．しかし長く村にいると，政権交代により農業政策が変化し，肥料供給システムが変わるように，決して彼らの生活が平穏で安定しているものではないことがわかってきた．そんなとき彼らは，不安定な状況を心配した私に対して，「キャッサバを栽培していれば大丈夫だ」と笑顔で語る．彼らは将来への不安や社会への不満を抱えながらも，変化を受け入れて生活の安定をめざし，粛々と生きていく．村の「銀行」は，村びとに生きる糧を与え，日々の生活を平穏なものにしている．

多様性と混沌とその先に

―ヨルダンの新聞社を訪ねて―

佐　藤　麻理絵 *

2011 年 8 月，私はヨルダンの首都アンマンにいた．7 月の初めに到着し，約 1ヵ月が過ぎようとしていた頃，ひとりの老人との素敵な出会いがあった．アラビア語の習得とフィールドワークに明け暮れていた私は，家から程近い市街の中心部に通うのが毎日の日課になっていた．スーク（市場）には新鮮な野菜や果物，香辛料が並び，大勢の人々が行き交う．ここで食材を調達し，地元の人々と何気ない会話を交わし（これがアラビア語の練習にもなる），家に帰って自炊をするのである．活気のあるスークに一歩足を踏み入れると，まず山積みになったトマトの真っ赤な輝きが目に飛び込み，歩くほどに野菜売りの掛け声が耳に心地いい．

もうひとつ日課となっていたのが，アラビア語学習のために毎日発行される新聞を手に入れることである．スークを抜けてヨルダンで一番古い「キング・フセインモスク」の前を横切り，左に曲がると，中央分離帯に立派なシュロの木を携えたキングフセイン通りに出る．この通り沿いにある郵便局の前に，おじいさんがひとりで切り盛りする新聞の屋台が毎朝出現する（写真 1）．どこから手に入れるのか，外国人の私に英語の雑誌を黙って渡してくれる．もの静かで優しい新聞売りのおじいさんは荷台の上に新聞を並べると，一日中そばの椅子に腰掛けて人々の往来を見守る．界隈に顔が広く，色んな人が立ち寄っては挨拶を交わし，新聞を買っていく．そんな新聞屋さんで，いつもどおり新聞を購入していると，ひとりの老人（H 氏）が近づいてきた．足が少々不自由で杖をつきながらゆっくり歩み寄ってきた H 氏は，綺麗な英語で私に話しかけてきた．

英語とアラビア語の 2ヵ国語を完璧に操る H 氏は，*al-Ghad*（アル＝ガド）紙で，国際ニュースを担当する記者である．ヨルダンでは 10 紙ほどの新聞が発行されているが，最も目にするのは，*al-Ra'y*（アッ＝ライ）と

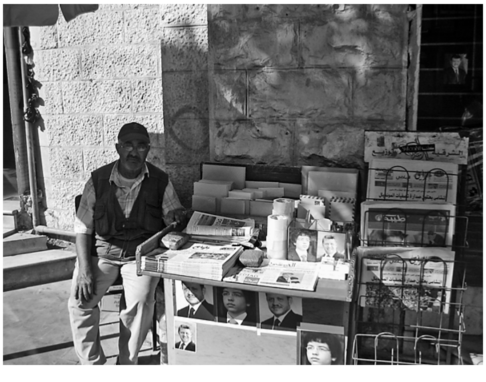

写真 1　アンマンの新聞売り

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

al-Ghad の 2 紙だろう．ヨルダンのニュースを英語で知ることのできる英字新聞 *Jordan Times* も代表紙のひとつといえる．H 氏は，エルサレムの出身で，自分はパレスチナ人だと話した．クウェートで長くジャーナリストをしていたとも話した．ヨルダンにはイスラエル建国や中東戦争の勃発により大勢のパレスチナ人が流入し，人口の 50～60% を占めるともいわれる．都市アンマンに多くが居住し，ヨルダンの形成と発展を担うと同時に，時にヨルダン国家を脅かす火種ともなってきた．圧倒的な人数のパレスチナ出身者を抱えながら，隣国を中心に避難民を受け入れてきたヨルダン及び都市アンマンには，さまざまな人が混在している（写真 2）．中東戦争に湾岸戦争，レバノン内戦，イラク戦争と，度々発生する隣国での戦火を受けて人々が移動する中，ヨルダンは常に門戸を開き，彼らを受け入れてきた．H 氏もクウェートに職を求め，その後湾岸戦争によりヨルダンへと避難し，移動を繰り返してきたのである．

私は新聞屋台での出会いをきっかけにして，H 氏の職場である *al-Ghad* 紙の新聞社

写真 2　金曜礼拝の様子@キング・フセインモスク

を訪ねた．*Al-Ghad* 紙を発行するのは，2004 年に設立された比較的新しい新聞社で，読者の知性を尊重し，真実を知る権利を守ることが社是とされている．H 氏は，主に欧米の主要紙に掲載された論考をアラビア語へと訳し，掲載するコーナーを担当している．国際社会で起きている事柄について，世界のさまざまな論者の考えや論評が記されたものを，直接伝えることがそのコーナーの使命なのだという．H 氏は英字新聞の論考を一読し，手を休めることなく手書きでアラビア語へと訳していく．途中で詰まることもなく，スラスラ右から左へアラビア語が踊った．大体ひとつの論考を 5 分から 10 分程度で訳すのだという．デスクには巨大な英英辞典がひとつ，パソコンはない．

ヨルダンは 1921 年イギリス保護下において，トランス・ヨルダン首長国として建国された後，1946 年に委任統治から正式に独立した．1921 年にイギリスが，預言者ムハンマドにつながる系譜をもつハーシム家出身のアブドゥッラー（’Abd Allāh ibn al-Ḥusayn）を王に推戴したことから，ハーシム家による世襲王制が現在まで続く．長らく戒厳令下におかれ，政党活動の禁止や議会が凍結された状況にあったが，経済状況の悪化から 1989 年に 22 年ぶりの総選挙実施，国内政治自由化へと体制変化が起きた．国内メディアを取り囲む状況にも変化が起き，同時にグローバル化に伴う衛星放送の普及とインターネットの普及により，言論の場は拡大していく．

世界的にみても，新聞業界は危機的な状況にさらされているといえるだろう．ネット全

盛の昨今，電子媒体でのニュース配信が増加し，紙媒体の新聞は苦境に立たされている．IT 化の推進が著しく，「中東のシリコンバレー」とも呼ばれるヨルダンには，ニュースを配信するウェブサイトが多数存在する．ヨルダンの新聞業界もウェブサイトと連携して情報を発信しており，実際に新聞を手にする人は，知識人を中心とした一定の限られた人々が中心である印象を得た．*Al-Ghad* 紙は，ヨルダンだけでなく中東アラブ地域のジャーナリズムを牽引していくような媒体となることを目指して設立されたのだと，H 氏は語った．

A4 のコピー用紙に手書きで書かれた H 氏のアラビア語訳原稿は，パソコンに文字を起こす係へと渡った．新聞社の中は意外にも整然と片付いており，ガラス張りで見通しの良いオフィスに机が並んでいた．報道，文化，スポーツ等のセクションごとに配置されているものの，特に仕切りがある訳でもなく記者たちは自由に行き来することができる．通路の突き当たりには小さな食堂兼カフェがあり，私が訪れた夕方の時間帯はタバコを片手にシャーイ（紅茶）やコーヒーを飲みながら談笑する記者たちの姿がみられた．私もシャーイをもらい，食堂の片隅に座った．隣には「紙面全体を統括する人」と紹介されたベテラン記者が新聞を広げて，右手に赤ペン，左手にタバコのスタイルで記事をチェックしている．いわゆる「デスク」という立場にある人だろう．

一瞬にして彼の周りが記者たちによって囲まれた．デスクの指摘に，記事を書いた記者本人が意見を述べ，それに食い込むようにして周りが口を開く．活発な議論の輪は，食堂の料理人までをも巻き込んだ．良くも悪くも話し好きで，主張が強いアラブ人気質が大いに感じられるひと幕であった．ひととおり議論が落ち着くと，この新聞社には H 氏のようにヨルダンに「行き着いた」人が多くいる，とデスクは口を開いた．ここはジャーナリズムというプロフェッショナルな人々が集合する場であり，それを誇りに思っているとも語った．

私たちが新聞社を後にする頃には，辺りはすっかり暗くなっていて，新聞社の横にある印刷工場が翌日の朝刊を印刷しているのか，忙しそうに稼働していた．H 氏とその同僚である M 氏と夜道を歩いていると，ビルの大きな広告看板に掲げられたヨルダン国王のポスターが目に入った．町中の至る所で見ることのできる国王のポスターは，お店の中や人々の家の中にも掲げられ，一日に何度も目にする．

その夜，私は H 氏，M 氏とともに夜ご飯を食べに町へ出た．水タバコとともに，H 氏は幼少期を過ごしたエルサレムの話を，キリスト教徒である M 氏はヨルダンのキリスト教事情について話してくれた．夜も更けてきた頃，H 氏は遠くを見つめながら「本当に書きたいことなんて，本当は書けていない」と言った．国王のポスターがあちらこちらに掲げられる君主国家ヨルダンでは，国王批判や政権批判を公然と行なうことはやはりはばかられるのだという．見えない圧力がかかることもある，とも話した．「ヨルダンには

みせかけの民主主義しかない，本当の民主主義はこの国にはない」と話す冷静な口ぶりからは，いろいろな土地を渡り歩いてきた経験がＨ氏にそう語らせているような気がした．

中東アラブ世界は変動の最中にある．安全と平穏を求めて避難をしてきたさまざまな人々に対し，門戸を開き続けてきたヨルダンは，現在はシリアからの人々を受け入れている．シリア内戦は終わりの見えない泥沼状態にあり，今この時も人々は戦乱の中を生き，日々尊い命が失われている．ヨルダンという隣国へ僅かな希望を託し，移動する人々の増加が今後も予想される中，この国はどのように舵を切っていくのか．Ｈ氏のいる報道の現場では，ジャーナリズムの役割と責任はどのように果たされるのか．多様な人々を抱えるヨルダンの，混沌と先の見えない未来を垣間見たような気がした．

カンボジアの森林保護区滞在記

鈴　木　　　愛*

寒い．眠れない．森の中のハンモックの中で，体を丸める．ダンゴムシならきれいに丸くなれるのに，体の硬い自分はこの程度なのか．小さな生物の美しい姿を羨みつつ，可能な限り空気に触れる面積を小さくし，朝を待つ．調査地の年間最低気温は 24 度．冬といわれる時期であってもこのような寒さを経験することはないだろうと思い込んでいた．近くに設置されたハンモックもごそごそと揺れている．みんな寒くて眠れないのだろう．朝，5 時が過ぎた．あまりの寒さにフィールドアシスタントが焚火を始めたようだ．ハンモックから這い出し，マントのように体に巻きつけた毛布ごと焚火に向かう．小さな火を調査チーム全員で囲んでいると，ようやく待ち望んだ暖かな太陽の光が届きだす．体が暖まる．みんなの顔が明るくなってくる．さあ，朝食を食べて，調査へ出発だ！

プレアビヒア森林保護区

私が滞在している森は，ラオスとタイと国境を接しているカンボジア北部のプレアビヒア州に位置する．プレアビヒア森林保護区と呼ばれるこの場所には，東南アジア大陸の多くの地域で消失しつつある低地林が残存している．生物多様性が高く，地球上の生物多様性保全を考えるうえでも貴重な地域である．特にオニトキ *Thaumatibis gigantea* という大

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真 1　保護区内に開通した道路と，道路の脇に並ぶ兵士の家族のための住居
住居は道路の両脇に並び，住居の奥には畑が広がっている．

型の鳥類にとっては，地球上で最後に残った重要な生息地のひとつとなっている．私がここを研究対象地域として選んだのも，東南アジア大陸部において，研究対象動物の個体数がまだ多く残っていると推測されている場所だからである．しかし，この場所にも経済発展に伴う生息地破壊の波は届き始めている．かつてはカンボジアの中でも人口密度が極めて低い場所であったが，近年の人口増加に加え，道路の開通やバイオ燃料用の農地開発とともに，人口流入が起こっている．

また，この森林保護区はタイとの国境紛争の火種である世界遺産のプレアビヒア寺院の近くに位置しており，その影響を大きく受けている．保護区内には軍の駐屯地があり，物資を輸送するための道路が開通し，兵士の家族には家と農業用の土地が与えられている（写真 1）．兵士は銃を持った密猟者にもなり，駐屯地近くの森に滞在していると，夜中によく銃声が聞こえる．密猟中の兵士は，保護区のパトロール隊に発砲することもあり，パトロール隊も命がけである．当然，私の調査チームにも，銃を携帯した警察官 2 名が入っており，24 時間行動をともにしている．調査中に危険を感じたことはなく，大げさだと思うこともあるのだが，万が一の事件が発生した時，波及する影響を考えると，警察官なしでの調査は行なえない．

この保護区には今までほとんど研究者が入っていない．その理由はいろいろあるのだが，野生動植物保全に関わる研究者は今まで 3 人のみである．1 人目はオニトキの研究者であり，カンボジア人である．2 人目はカウンターパートのスタッフで，霊長類の調査を 4ヵ月にわたって実施している．そして，3 人目となる私は，初めての外部者である．保護区の今後の研究の活性化のためにも，受け入れてくれた国際 NGO や森林局のためにも，事故に巻き込まれるわけにはいかないのだ．

楽しい調査もポーカーフェイスで？

銃を携帯する警察官 2 名を連れて調査せざるを得ない状況であっても，森の中での生活はやはり楽しい．朝の楽しみは，昇ったばかりの朝日に照らされた森を見ながら飲むコーヒーだ．ここの朝日の光は柔らかく，森を優しい色に包んでいく．カンボジアの景色として，一番初めに思い出す美しい景色である．コーヒーを飲んだ後は朝食だ．森の中の食事のメニューは朝，昼，晩，ほとんど変わらない．主食は白米，主菜も白米，副菜が干し肉や干し魚といった感じである．少しのおかずやプロホック（魚を発酵させたもの）で

大量の白米を食べるのがカンボジア流である．森に入る前に買い込んだ保存食が尽きると，その辺で調達したカエルの丸焼きが並ぶ．普段はベジタリアンの私も，ここでは何でも食べる（写真 2）．

朝食を食べると，白米と干し魚などをビニール袋に突っ込み，調査に出発する．調査では動物の痕跡を探して歩き回る．もしかすると昨日，研究対象種が歩いたかもしれない森の中を歩いているとドキドキする．直接，動物を見ることができなくとも，痕跡だけで十分嬉しい．単純な思考の持ち主は，幸せを感じやすいのだろう．しかし，それは欠点にもなる．思考が表情にそのまま出てしまい，ポーカーフェイスが出来ないのだ．これが調査に思わぬ影響を及ぼした．この調査では，できるだけ多くの情報を集めることを目的としていた．そのため，調査チームの 5 人（私，カウンターパートのスタッフ 2 名，警察官 2 名）がそれぞれの視点で森の中を歩き，それぞれの視点から得られる情報を収集する予定であった．だが，集まってくる情報が私の研究対象種の痕跡に偏り始める．おそらく痕跡の持ち主である動物の種によって，私の反応が明らかに異なっていたのだ．気づいた時には，もう手遅れだった．私の表情がチームの情報収集の形を変えてしまったのである．

写真 2　森の中で食事をする場所を探す
手や食べ物を洗ったり，飲み水を補給できる水場で食事をとる．

その一方で，研究対象種の痕跡を見つけると，私は相当嬉しそうだったのだろう．その動物分類群に関する情報の量は格段に増えた．フンを見つけては分解して内容物を確認している私をうんざりした顔で見ていた警察官でさえ，数ヵ月後にはカメラの接写機能を覚え，貴重な痕跡の写真を撮ってきてくれるようになった．冷静に情報収集をしていたら，研究対象種の情報がここまで集まってくることはなかったであろう．

森の中の調査は楽しい．研究対象動物の痕跡を見つけると本当に嬉しい．しかし，この感情を表に出すことによって失うものもあるし，得るものもあった．言葉で「このような情報がほしい」と伝えることは簡単だ．しかし，本人の姿勢と表情は言葉より雄弁だ．言葉で伝えたことなどひっくり返してしまう．その時に必要な情報を考えながら，自分自身の姿勢や感情の見せ方をコントロールすることの大切さを痛感した．

酒と議論の夜

調査を終え，夜になると食事とともにスラーと呼ばれる 40 度のラオスの焼酎を楽しむ（写真 3）．フィールドアシスタントによ

ると，スラーはクールな飲み物ではないそうだ．金持ちや都会っ子はビールを好むらしい．このスラーは，私の重要なコミュニケーションツールでもある．言語オンチな私は，動物の種名など調査に使用する単語以外のクメール語を，なかなか覚えられない．言葉を通して仲良くなることが難しいならと思いついた苦肉の策が，スラーをともに飲むことだった．ペットボトルで作った即席コップにスラーを注ぎ，一気に飲み干し，次の人へまわす．一緒にほろ酔い気分になって片言のクメール語と片言の英語で会話し，大笑いする．この共有した時間から生まれる連帯感のようなものは，チームで調査をするうえで重要な人間関係の基盤を作ってくれる．

大笑いした後は，真面目な議論に突入する．たくさんの時間を共有し，打ち解けていくうちに，流暢な英語を話すスタッフが本音をぽつぽつと話すようになってくれたのである．彼は 12 年間，保護区を見てきたスタッフであり，ここの森のことは誰よりもよく知っている．彼の懸念は，保護区内で増加する違法行為と動物の個体数減少である．彼によると，以前は 1 週間森に滞在していても，人と会うことはほとんどなかったそうである．現在，調査をしていると毎日人に出会う．密猟や違法伐採の規模を肌で感じる．彼との議論のほとんどは，保護区の保全についてである．議論中は互いに絶望感や無力感に打ちのめされ，長い間，無言になることもある．保護区をずっと見てきた彼の悔しさが痛いほど伝わってきて，涙ぐんでしまうこともある．満天の星空の下，毎晩，暗い雰囲気になることもなかったのだが，なぜか議論しないではいられなかったのだ．民族を超えてつながる同じ願い．2 人で共有することで，無力感は割り算で半分に，希望は掛け算で 2 倍にしたかったのかもしれない．

写真 3　ペットボトルに入れたラオスの焼酎スラー
植物やムカデなどを入れることもある．

ハンターの願い

カウンターパートのスタッフが懸念している動物の個体数減少は，森林保護区内や保護区近隣の村のハンターたちも感じているようだ．あるハンターによると，昔はトラ *Panthera tigris*，アジアゾウ *Elephas maximus*，ガウル *Bos gaurus*，バンテン *Bos javanicus* などの大型哺乳類が多く生息していたが，今では以前と比較すると少なくなっているという．この情報の信憑性については，昔の個体数の情報が不足しているため，現在の個体数のデータを取っても個体数の動向を確認することはできない．しかし，いくつかの村で多くのハンターが同じように減少

を感じているので，個体数はやはり減っているのかもしれない．

動物の個体数減少を感じていると答えたハンターのひとりに，私の調査において重要な情報提供者がいる．彼は人懐っこく腕のいい若いハンターであり，動物に関する知識が豊富である．彼はインタビューの最後に何かを伝えてきた．クメール語をあまり理解できない私は，トラと森に関する話だということだけ察し，まっすぐに私の目を見て伝えてくる彼の目から思いを受け取る．

彼の話が終わり，通訳が入る．「俺はコープレイ *Bos sauveli*（絶滅した可能性がある大型哺乳類）を見てみたかった．俺の子どもたちにはこういう思いはしてほしくない．子どもたちにはトラがいる森を見せたい．」彼の目から届いた気持ちと時間差で，彼の言葉が心に突き刺さる．トラを例に挙げたのは，私の研究対象動物の一種がトラだと彼が知っているだけではない．絶滅の可能性が示唆されているコープレイと，ここ数年，痕跡をほとんど見ていないトラとを重ね合わせているのだ．彼の膝の上に座る子どもは，この森にも昔はトラがいたと教えられる初めての世代になるのだろうか．ハンターである彼と，保全活動に従事するカウンターパートのスタッフの懸念は同じだ．自分はここで何をやるべきなのか．どのようなスタンスで研究をすればいいのだろうか．状況を知れば知るほど迷ってしまう．答えはまだ出ていないが，求め続けたい答えがあるからこそ，きっと研究はおもしろいのだろう．

室内を彩る多様なクルアーン装飾品

二ツ山　達　朗 *

チュニジアの室内に飾られている装飾品の約 40%はクルアーンに関係するものである．このような数字からも，クルアーン装飾品がムスリムの生活にいかに浸透しているかが理解できる．本報告では，これらの装飾品がどのようなものであるかということを，チュニジアを事例に紹介したい．

クルアーン装飾品を含めた，イスラームの宗教グッズ（religious commodities, religious goods, religious things, religious items）を対象とする研究が 1990 年代から盛んになされている．グローバルな市場経済や消費文化が浸透するにしたがって，クルアーンなどの聖句が記されたものが商品化されて消費されて

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ゆく現代的現象をめぐって，これまでにも多くの研究がなされてきた［cf. Starret 1995; 大塚 2010］．宗教的商品にはムスハフ（書物の形状となったクルアーン）や，数珠，礼拝用マットなどさまざまなものがあるが，中心的に着目されてきたのは，近年出現した複製可能で大量生産できるステッカーやポスター，キーホルダーなどの商品である．たとえば，小杉はクルアーンが描かれた商品を「クルアーン・グッズ」と名付けて，クルアーンのテクスト性や口誦性がどのように日常的に使用されるグッズの中に発現しているかということを論じている［小杉 2008: 153-165］．

本報告ではそのようなクルアーンに関するグッズの中でも室内の装飾に使われている物に着目する．[1] 装飾品に着目したのは，キーホルダーや文房具などのように扱われ方が捉えにくいグッズに比べて，装飾品はどのように扱われているか（どのように配置されているか）が観察しやすいという理由による．「室内装飾品（ornament）」として観察対象にしたものは，壁に設置されている状態の（on the wall）もの全てであり，床や棚に置かれているものについては除外した．具体的には，額縁，ポスター，カレンダー，写真，シール，時計などがその大半を占めた．

本報告のもととなった資料は，2013年の1月15日から2月18日にかけて，首都チュニスと，南部の村であるドゥーズで行なった調査による．チュニスではシーディー・ブ・ミンディール（Sīdī bū mindīl）と呼ばれる商業施設が集まる地域において，ドゥーズでは市場（スーク）の周辺において，周辺の全ての店舗に調査の打診をし，許可が得られた店舗の屋内を観察した．カフェ，レストラン，肉屋，八百屋，雑貨屋，床屋，アトリエなどが主な対象となり，チュニス58ヵ所，ドゥーズ110ヵ所で調査を行なった．[2]

はじめに，これらのクルアーン装飾品は何故飾られるのか．調査をする中でインフォーマントが語った代表的な理由を簡単に述べる．

> よいこと（*ḥājāt bāhiyat*）をもたらすからです．よいこととは神の恩寵（*baraka*）です（2013.02.04. チュニス．レストラン店主）．

> いつでもアッラーのことを思い出すためです（2013.02.04. チュニス．カフェ店主）．

> ここに飾っておくのは常に勉強できるからです（2013.02.13. ドゥーズ．タクシーフォン店員）．

> （入口に飾っておくのは）入った時にみえ

1)「クルアーンに関する装飾品」の線引きは難しいが，ここではクルアーンに関連すると思われるもの全てを観察対象にした．たとえば，アッラーとだけ記されているものや，マッカの写真などは，クルアーンの章句自体が装飾品に記されている訳ではないが，その対象に入れた．

2) イスラーム圏では男性がひとりで個人宅に入ることに抵抗を示されるため，個人宅の調査結果が少なく，本報告では個人宅のデータは除外した．個人宅内のクルアーン装飾品については今後の調査課題として取り組む予定である．

て，仕事に対するやる気をもらえるからです（2013.02.15. チュニス. レストラン店主）.

プレゼントとして新婚夫婦のために選んでいるのです. これをプレゼントすれば間違いなく喜ばれますから（2013.02.01. チュニス. クルアーン額縁を買いに来た客）.

このように，クルアーン装飾品を飾ることによってバラカがもたらされたり，アッラーを思い出させたりするという理由が頻繁に説明された. このような現地ムスリムの装飾品の購入，配置，再配置などをめぐる宗教実践の記述は，本報告では深入りせず，次稿で中心的に扱うことにしたい. 本報告では，その宗教実践を喚起しているクルアーン装飾品自体に注視し，それらがどのようなモノであるかということを報告する. 桑原［2005］は，物理的なモノがどのように人々に作用し，実践を喚起するかということを「工学的」に論じようとする. 本報告でも，ムスリムを魅了し，購入させ，室内に配置させるクルアーン装飾品が，どのような形状であるかということを報告する.

観察した168店舗のうち，クルアーンに関する装飾品が飾られていたのは，125店舗であった. それらの店舗では455個が確認でき，その中で同じ種類のものが確認できたのは，11種類，32個のみであった（最も多く重複していたのでも5個のみであった）. つまり，455個のうち434の種類があり，観察する中で同じ装飾品がみられるほうが希であった. 同じ種類の装飾がみられた10種類のうちの9種類は無料で配布されるカレンダーであった. すなわち，額縁，ポスター，ステッカーなどの購入される装飾品は，ほとんど同一種のものは確認できず，多様な種類のクルアーン装飾品があることが理解できる.

434種類のうち，425種類にはアラビア語で文字が記されていた. 一番多く書かれているものは，「アッラー」で75種類，続いて「ムハンマド」が63種類，「慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において」が56種類あった.[3] クルアーンの章句が書かれたものとしては，黎明章（113章）が28種類，雌牛章台座の節（2章255節）が26種類，人々章（114章）が25種類，純正章（112章）が22種類，ヤー・スィーン章（36章）が21種類，慈悲あまねく御方章（55章）が17種類，神の99の美称が記されたものが25種類，ドゥアーの類が記されたものが25種類あった. ひとつの装飾品にいくつかの章句が記されることもあり，たとえば黎明章・人々章・純正章などはひとつの装飾品に一緒に記されている場合も多い. これらの3つの章は短く，礼拝時に好んで唱えられる.

このように，ある特定の句が頻繁に引用されているが，先述したように同じ種類の装飾品はほとんどない. つまり，1種のテクストでもデザインが千差万別なのである. たとえば黎明章というひとつのテクストであって

3) これらの句は，クルアーンの章句の中で出てくる場合を除いて，単体で記されている場合のみ数えた.

写真1　ドゥーズの床屋の北壁面
（2013年2月12日筆者撮影）

も，28種の異なるデザインの装飾品が確認できた．それらの多様なデザインとはどのようなものであるのか．

まず，装飾品としての形状であるが，455個のうち，額縁タイプのものが133個と最も多かった．これは現地ではクアートロ（*quāturo*）と呼ばれ，縁のついているものを示す．調査では額縁がついているものは全てこの類に数えた．素材はプラスチックや木材がほとんどである．その他には，紙素材のポスター107個，同じく紙素材であるカレンダー92個，シール41個，吊るすタイプの小物28個などが代表的であった．他にも数は少ないが時計，タイル，皿，電光掲示板などもあった．

全434種類のうち，ただ単にテクストのみが記されているというものはほとんどなかった．すなわち，ほとんどの装飾品にはテクストが記されているが，それと同時に文様や絵も一緒に描かれたデザインになっている．その中でも植物文様は多くの装飾品に共通して確認できた．434種のうち，211種（全種のうちの約48.6%）に植物文様（アラベスク）がデザインされていた．[4] それらの植物文様以外にも，実写的に描かれている花が15種，樹が11種，葉が5種あった．その他に多かったデザインとして，マッカが55種，ムスハフが20種，子どもが15種，幾何学模様が15種，ミナレットが11種，他には少数だがメディナ，岩のドーム，月や星，鳥，海，山，魚，蝶などが描かれたものもあった．これらのデザインが多彩なクルアーン装飾品の種類をつくりあげている．

また，テクストが記されていないがクルアーンに関係すると思われるデザイン（たとえばマッカの写真，ムスハフの絵，礼拝している子どもなど）が描かれているものが9種あった．このように，クルアーン装飾品であっても，テクストの内容が必ずしも重要ということではない．たとえば，何が記されているか店主や客などに訊ねてみたところ，なかなか解らず，別の何人かの客などを巻き込んでようやく「人々章」と解ったことがあった（2013.02.10．チュニス．カフェ）．このような事例は頻繁にあり，クルアーン装飾品はテクストの内容が常に重要であるとは限らないことが理解できる．

4) 桝屋［2009: 84-85］は植物文様とイスラームの楽園思想との結びつきを述べており，イスラームの信仰における植物の重要な役割が理解できる．

もちろん，クルアーンのテクストは重要な要素のひとつではある．たとえば，紙やダンボールなどに章句を自ら書いて貼っている自家製クルアーン装飾品も，3 例ではあるが確認できた．このことは，テクストの重要性をよく示している．

しかしながら，実際にはほとんど全てのクルアーン装飾品が，テクストのみではなく何らかのデザインと一緒に描かれており，さまざまな形状の装飾品が存在することが判明した．テクストとともに，テクストにまとわりつく形状が，ムスリムに装飾品を購入させ，それを室内に飾らせていることが理解できる．

以上，チュニジアの室内におけるクルアーン装飾品を，宗教グッズの一事例として紹介した．先述したように，先行研究では宗教グッズの複製可能な大量生産品としての性質が，ひとつの論点として議論されてきた．しかしながら，複製可能な大量生産品として想起されるような，同じものが多く存在するイメージとは裏腹に，それが使用されている現場では，実にさまざまな種類のものが使用されており，同一のものを探すほうが難しい．たとえ大量生産されたものでも，ムスリムたちは自らの嗜好にあったオリジナルなクルアーン装飾品を選んで飾り，自らの宗教実践の中に取り込んでいるのである．

引　用　文　献

Starret, G. 1995. The Political Economy of Religious Commodities in Cairo, *American Anthropologist* 97: 51-68.

大塚和夫．2010．「宗教施設の商品化とその限界」私市正年・赤堀雅幸・寺田勇文編『グローバル化のなかの宗教ー衰退・再生・変貌（地域立脚型グローバル・スタディーズ叢書）』ぎょうせい，113-132.

桑原知子．2005．「〈彼岸工学〉ことはじめー『この世ならぬもの』を演じる・からくる・生きる」『九州人類学会報』32: 11-21.

小杉麻李亜．2008．『イスラームの聖典クルアーンの人類学的研究ーテクスト性と口誦性を統合する文化装置論的アプローチから』（立命館大学大学院　先端総合学術研究科博士論文）

桝屋友子．2009．『すぐわかるイスラームの美術ー建築・写本芸術・工芸』東京美術．

ボンボ（悪霊）がやってきた日

大　出　亜矢子 *

私はインドネシア，南スラウェシ州の山岳地，北トラジャ県を対象に，土地利用の動態を調査している．調査県は急峻な山岳地に位置し，高地の村落を調査するためには，アク

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

セスにバイクと徒歩で1日を要する．そのため私は，下流域にある県都ランテパオのバス会社の社員宿舎に部屋を借りて荷物や機材を置かせてもらい，数日間かけて山の上の村落に調査に向かうことにしている．

ランテパオは，北トラジャ県の政治・経済の中心地であり，大通りは夜でもとても賑やかだ．毎晩，人々の関心を集める何らかの事件に出くわすことができる街だ．ベランダから外を覗いていれば退屈することはない．

写真1の犯人は，警察と野次馬を併せて総勢200人を超える人に見守られ，2時間後にトイレから出てきた．遭遇した印象深い事件は枚挙にいとまがないが，ここでは背筋が凍る，ある夜の事件をひとつ紹介したい．

さては，アヤコか，悪霊か…

コツ・コツ，コツ・コツ．午前4時半，社員宿舎の全部屋のドアが一斉に何者かによって叩かれた．

ドン・ドン・ドン・ドン・ドン・ドン．そのドアを叩く物音は一層激しさを増し，数分

写真1　バイク泥棒トイレ立てこもり事件
（2012年10月13日，宿舎向かいにて）

間にわたって続いた．そして，その物音によって眠りから起こされた宿泊者たちはドアを開けたが，そこには誰の姿もない．呆気にとられた宿泊者たちは，顔を見合わせるとみな1階のインターネットカフェに集まった．

ひとり，またひとりと部屋のドアを開き，ついには1階に全員が集合した．しかし人数がひとり足りないことに，宿舎の女主人は気が付いた．心配になった彼女は部屋から出てこない宿泊者を呼びに2階へ上って行った．

「アヤコ，アヤコ！」と私の名前を大声で呼んだ．しかし，ドアには鍵がかかっており，部屋の中からは一向に返事がない．

女主人はひとまず1階に降り，状況を報告した．すると，全員がざわつき，さっきの物音の犯人は誰だったのかという話になった．ひとしきり盛り上がったところで，集まったメンバーの中で最年長者である，女主人の母親のイブが神妙な面持ちで口を開いたという．

「マカニャ…アヤコ，アタウ，ボンボ（さては，アヤコか，悪霊か…）」

もちろん，犯人は私ではない．私が悪霊なわけでもない．

ちょうどその日，私は隣県との境界にある村落で3日間かけて土壌の採取とインタビュー調査を終え，久々に宿舎に帰ってきたところだった．いつもなら，宿に帰った日の夜は，私は1階のオープンスペースで雑談をしたり，コンピューターのデータ入力の作

業をしたりと，宿舎のメンバーや家族と顔を合わせている．その日は移動が長かったせいか，いつになく疲れていたため直接自室に戻った．その後すぐに床につき，翌朝窓から朝日が差し込むまで，深い眠りについてしまった．そのため明け方にあったというドアを叩く音にも，名前を呼ばれる声にも全く反応しなかったのだ．

イブが私をノックした犯人として疑うのにはわけがあった．私はたびたび，データ整理の終わらない夜など，皆が寝静まってからも深夜まで1階のインターネットカフェを使わせてもらっていた．しかし，市街地の中心で深夜まで煌々とガラス張りのインターネットカフェから明かりがもれていれば，さまざまな来訪者がやってくる．その度にガラス越しの筆談で丁重に事情を説明して帰ってもらっていたのだが，明け方のノック事件が起きるちょうど1週間前の深夜に，少々厄介な来訪者があったためイブに確認をとるため，部屋のドアをこつ，こつとノックしたことがあった．その時，結局イブは起きず，私は交渉を断念したのだった．翌朝になってイブに事情を説明すると，「起こしたいのなら，ドアを思いっきり叩かないと私は起きないわ」と笑い飛ばされた．その記憶の新しいうちに，“事件”が起きた．その際イブは真っ先に，ドアを必死に叩くアヤコの姿を思い浮かべたのだそうだ．

“事件”当日，朝6時を過ぎて，ようやく目を覚ました私は1階へ下りてみると，早朝にもかかわらず，そこにはいつもより多くのメンバーがそろっていた．ノック事件の話に花が咲き，ほとんど全員が朝までそのまま話し込んでいたそうだ．

皆からの熱狂的な説明を受けて事情を把握した私は，その「容疑」に対して，自分は犯人ではないと早々に告げた．すると何人かが歓声としか考えられない奇声をあげた．その表情はイキイキと明るく，そこにいた皆がボンボの来訪を確信して喜んでいた．なぜ皆はボンボの来訪を喜んでいたのだろうか？

ボンボとは，トラジャ語で最近死んだ，もしくは今死にかけている魂を指し，悪霊や死霊を意味する言葉でもある．

私は，皆がノックをした犯人が，ボンボではなく，生身の私であることを期待しているのだろうと，実際とは真逆の反応を想定していた．そのため，展開が読めず，少し呆気にとられてしまった．

では，私が羨ましさを覚えるほど，彼らを夢中にした「ボンボ」とは，一体トラジャの人々の中でどのような存在なのだろうか？

ここでは，トラジャの歴史と習俗文化をたどりながら，トラジャにおける精霊信仰，死生観について，調査者のフィールドの経験をもとに考えていきたい．

トラジャの伝統宗教「アルク・トドロ」

トラジャとは，ブギス語で“人々”を意味する *to* と“高地”を意味する *ri-ja* を組み合わせて作られた，土地の呼称である．

1892年から始まるオランダ人宣教師の布教活動を通じて，“Toraja”は中・南スラウェシに住むすべての高地民を示すとされた．のちに文化人類学者によって文化と言語の観点

から基礎的な民族の再分類が行なわれ，中スラウェシの高地民が“Toraja”，南スラウェシのサダン地域に住む高地民が，“Sa’dan”と定義された．

しかしながら，現地の人々の間で浸透しなかったために実際にこの呼称が世間に定着するには至らなかった．

1930 年にサダン地域が独立する際に，地域政府は“Toraja”という名前を受容した．そのため，現在ではトラジャという言葉は，南スラウェシ州のサダン川上流に位置する地域を指して用いられる．

現在住民の多くはキリスト教を信仰している．これは 1950 年代以降にスラウェシ島南部で生じたイスラム教過激派の独立運動に対抗するためにトラジャ地域の人々が団結し，積極的にキリスト教に改宗したからだ．

しかし，それ以前には精霊崇拝と関係の深いアルク・トドロと呼ばれる伝統宗教が信仰されていた．これらは現在でもトラジャの伝統的な習俗儀礼の中にみることができる．

習俗儀礼にみえる死の文化

大小さまざまな丘陵地帯からなる山岳高地に位置するトラジャでは，集水性の高い谷地形が発達し，水稲栽培が伝統的に行なわれてきた．このため，稲作儀礼には顕著に，旧宗教アルク・トドロの精霊信仰が表れている．たとえば，田植え前には，ボンボが害を与えぬよう，供物として呪術者が米，酒，水，たばこなどを芭蕉葉にのせて供え，雌鶏の血を田に注ぎ，その肉の一部もまた芭蕉葉の上に一緒に供える．

血肉の生贄の風習はトラジャのさまざまな伝統儀礼においてみることができる．

葬送儀礼においては，水牛は死者を冥界に導く使者，そして冥界での財産とされ，社会階級に応じた数の水牛が屠殺される．また豚も同時に数頭～十数頭殺される．それらの肉は，黒衣をまとった参列者らに対して配分される．婚姻儀礼の際には，水牛を殺すことは許されず，豚肉のみが振舞われる．

慣習上，こうした儀礼は農閑期に行なわれていたが，近年では年間を通じて開催されている．それは，トラジャにおいて，伝統儀礼（特に葬送儀礼）は観光資源化されており，地域政府から，開催時期をかつての農業暦に従わないようにと勧告が出されているためである．そのため，どこかの集落で催されるこうした儀礼に，私も 1 週間に 1，2 度はタバコと引き換えに参列し，大量の豚肉（葬送儀礼ならば水牛肉も）とヤシ酒でお腹を満たしていた．葬儀との遭遇は，スコップを背負って山岳地を往来する調査者にとって，とてもありがたい機会である．山岳高地の源流部では，河川に魚をみつけることは難しい．その

写真 2　婚姻儀礼用に殺されたオス豚

ため，それぞれの家族は，庭に養殖池を掘り，そこに数匹のナマズを飼育していることも多い．子どもたちにとって，ナマズは貴重なタンパク質源であり，ご馳走である．日常の食事にてタンパク質を摂取する機会の少ない彼らにとって，葬送儀礼は，またとない肉の補給チャンスである．葬儀があるという噂を聞きつけると，子どもたちは目をキラキラと輝かせる．私も調査用ザックの底には黒衣を忍ばせており，いつでもどこでも死者の弔いに参加する支度をしている．

私は当初，葬送儀礼への過程やその最中においても，「死」が日常と結びついている様子に，ずいぶん驚かされた．まず人が亡くなると，遺体の腐敗を防ぐ特別な注射や薬草を塗る処理が施された後，親族がお別れを告げに戻ってくるまで，もしくは葬儀をする資金の準備が整うまでの数日間から数年間，人々が日常生活をおくる，舟形の屋根をもつ伝統家屋の中に安置される．ここではまだ冥界に渡る前なので，生前と変わらず，まるでそこで寝ているかのように扱われていた．そして葬送儀礼の際に，冥界への引渡しが行なわれる．儀礼を終えて，棺が墓地へと参列者の男たちによって担ぎ運ばれる際には，あの世へと向かう死者を決起するためと，大きな歓声とともに，御輿が激しく揺すられていた．

参列者が全員で御輿のお供をする，1時間弱の間に，私が気付いた限りで4度も棺が激しくバウンドし，御輿から飛び出して地面に放り出されていた．その度に笑い声が起き，御輿を修復し，また上下に揺する，ということの繰り返しだった．それは，同じように黒服を纏いつつも「しめやかに」執り行なわれる日本の葬儀の雰囲気とはまるで異なり，真っ赤な血と肉が溢れるお祭りのようである．

写真3　振り落とされた棺を御輿に収納し，つぶれた箇所を修復する男たち

また調査の仕事を終えて，夕方に友人らと談笑していた際，私は彼らにお気に入りの場所につれていってほしいと懇願した．すると，谷の縁の丘に連れて行かれた．

夕日が低い角度から斜めに射した棚田の谷は，畔の段差に立体的な影が入りとても美しかった．それに感動していると，友人は，自分がその地点を気に入っている理由は景色の美しさではないという．谷頭部の岩壁には先祖の墓があり，死んだ先祖の霊に見守られている感じがして落ち着くのだそうだ．

このように，トラジャの「死」が日常生活にとても近いものであり，いくつかの観光名所化された墓地の雰囲気のような冷たく暗いイメージとは対照的であることに，私は滞在中に何度も気付かされた．

アヤコ，アタウ，ボンボ？

トラジャの西にはアワン（雲）という名前のつく地域がある．2 週間ほど，調査のためにそこに通っていた．毎日調査を終え宿舎に帰る度に，インターネットカフェで働く若いお兄さんから，「アヤコ，天国から何回目の甦りかい？」と，なかなかのブラックジョークを笑顔で飛ばされる．トラジャではブラックジョークにはブラックな返答が必要だ．きっと次回調査もまた同じ冗談を言われるだろう．そのときは，元気にこう答えようと思う．「プランニャ，ボンボ！（ボンボのおかえりだよ！）」

ところで，宿舎に来訪した「ボンボ」は一体何者だったのか？　実は，事件には後日談があり，翌日バス会社の運転手が衝突事故で亡くなったという知らせが入った．恐らく，明け方にその魂が宿舎に戻ってきたのだろう．ではなぜ私にだけ何も聞こえなかったのか？

私はトラジャの魂や精霊の気配を受け取るには，まだまだ未熟なのかもしれないと思った．

陽を待つひと

近　藤　有希子 *

「お天道さまが照らしてくれれば，壺がつくれる．そしてわたしたちは食事にありつける．雨が降ると，わたしたちは死んでしまう．もちろん，雨が降らないとマメが育たないことも知っているけれど．」

トゥワの女性，シャンターリと初めて出会ったとき，手のなかでくるくると壺ができあがっていくようすに見入っていたわたしに，彼女はつぶやいた．昼ちかく，ひらけた空に太陽が眩しかった．

ルワンダ共和国の南西部に位置するわたしの調査地 K 村は，標高 1,900 メートル前後の丘陵がひろがる冷涼多雨な地域である（写真 1）．「2 日雨が降れば 1 日晴れて，そしてまた 2 日雨が降る」とは村の古老が教えてくれた天気の法則であるが，この地域では乾季とされるときであっても，雨が降ることもしばしばだ．何気なく発せられたシャンターリの言葉が胸にとまったのは，わたしが普段つきあうフトゥの人びとには，雨を好む人が多いからである．彼らは農耕に従事しており，主としてインゲンマメを栽培する（写真 2）．

雨が降る前には丘を駆けめぐるようにして冷たい風が吹きはじめ，重たい雲が垂れこめ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

写真１　丘の細部まで耕されるルワンダの畑

写真２　収穫直前のインゲンマメ

る．水分をふくんだ空気を肌に感じながら，人びとは雨の到来を予感し，それを迎える準備をする．そうこうしていると，雨はなにくわぬ顔をしてやってくる．どこかへ向かう途上にあった人は，だれかの家のひさしの下へともぐり込む．ルワンダの雨は，静かに降る日本の雨に似ていることもあれば，人びとの会話を奪い去ってしまうほどのつよいものの場合もある．午前中，太陽が地面をよく照らした日には，雨は昼過ぎに1，2時間でざっと降り，雨季が近づけば日がな一日降り続けることもある．

シャンターリとの出会いは，2012年11月．彼女たちトゥワの人びとは，それ以前までK村の隣村にくらしていたが，現政権の推し進める集村化（*imidugudu*）政策にもとづいて，ひと月前の10月にK村にやってきたばかりであった．

その政策は，もとは紛争中に難民となって近隣諸国に流出していた人びとの国内帰還にあわせて，彼らの土地や家屋を確保するために，1994年の虐殺直後にルワンダの一部の地域で開始されたものである．それが現在では，人びとを道ちかくの一ヵ所に住まわせて集住村とし，農業の効率化と生産性の拡大を目指すための政策として，国中で実施されている．「千の丘の国」と形容されるルワンダでは，従来，人びとは丘の斜面に点在した散居村でくらしていた．そして，それぞれの家のまわりを取り囲むようにして耕作地は存在していたのだった．

トゥワの人びとのための合計12軒の家をつくったのは，K村をふくむN地区にくらす人びとであった．建設にあたって，通常であれば毎月1度，第4土曜日に実施される公共労働（*umuganda*）が，週に2度の頻度でおこなわれることもあった．

このトゥワというエスニック集団に属する人びとは，先住民や狩猟採集民とされ，現在は土器づくりに長けていることで有名である．しかし，これまでルワンダにかんする物語のなかで，彼らが中心となることはほとんどなかった．ルワンダの主要な登場人物といえば，その人口の約8割強を占めるフトゥ系の住民と，約2割弱のトゥチ系の住民であり，

さらに1994年の大虐殺などをめぐる，その両者の関係ばかりにスポットライトがあたってきたからである．それに対して，トゥワの人びとはルワンダの人口の1%程度であり，長らく差別されてきたマイノリティ集団とされている．K村の住民は，ルワンダ全体の人口と比例するかのようにフトゥ系の人びとがほとんどを占める．そして，トゥワの人びとが移住してくる以前には，彼らは丘の低地に位置する隣村にくらしているときいていた．

そのトゥワの人びとがK村に引っ越してきた．ほどなくしてわたしと親しくなったシャンターリは，毎週火曜日に町でひらかれる市場にむけて，おなじ集住村にくらすトゥワの人びとのなかでは誰よりもおおい，20個前後の壺を1週間でつくってしまう．魔法のように壺を編み出してゆくちいさな手とその手先，壺づくりの最中にカメラにむかって時折さしはさむ自信に満ちた表情，日光の下でつやつやと輝く一列に並べられた火入れ前の壺たち（写真3）．そういった一切に，わたしは一瞬で魅了されてしまった．それに，彼女たちがつくりだす空間は，わたしがそれまで見知っていたものとは，すこしだけ違っていたのである．

ルワンダの人びとは静かである．人だけでなく，村も，そして日々の生活それ自体も，ほんとうに静かなものだ．それは，けたたましく朝を知らせてくれるような家畜がいないせいかもしれない．ほかの研究者がいうように，現政権による強権的な体制が人びとの沈黙をつくりだした結果なのかもしれない．いずれにせよ，わたしが知っているのは，霜が降りた寒く薄暗い早朝には，白い世界のなかに姿を隠そうとするかのように，人びとはひっそりと畑仕事に向かうことである．

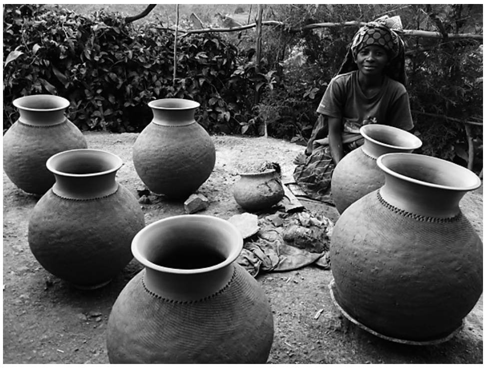

写真3　成形された壺
成形を終えると，陽あたりのよい場所にそれらを並べる．

一方で，トゥワの人びとはすこし違う．初めて集住村を訪れたわたしを興味津々に取り囲んだトゥワの人びとは，たとえばわたしがそこにくらす子どもの年齢をきけば，たちまちみなで声を重ねあいながら議論をはじめる．「こいつは15だ」「いや10だろ」といった具合に．なんでもない日々の動作のなかに音楽が生まれ，リズムが刻まれる．決して激しいものではない．むしろささやかな．それでも，いつだったか「アフリカ」と一括りにして勝手に思い描いていたころのような懐かしい憧憬は，彼らのところにすこしだけあった．わたしの行動や振る舞いを規制し，監視するなにかはそこにはない．そのことに，わたしはいつも胸をなでおろす．そして，安心感にも似たじわっとした感覚に気がついて，すこし決まり悪くなる．

なぜなら，こうしてトゥワの人びとに会い

に集住村に来ることは，わたしにとっては楽しみのひとつであったけれど，滞在先の老女をはじめとする村のフトゥの人たちは，あまりよくは思っていなかったからである．ある日の夕方，わたしは集住村で，仕事にでかけたシャンターリの帰りを待っていた．すると15分も経たないうちに，わたしの背後にフトゥの親しい少女が立っていた．彼女はトゥワの人たちにろくに挨拶もしないまま，「ユキコ，帰るよ」となかば強引にわたしを連れ出した．別の日にも，集住村に訪れていたわたしを丘の上からみかけた村の人が，「ユキコ，すぐに帰りなさい」と呼びかけるのであった．

ところで，K村での3度目の滞在となった2012年12月，わたしはある「事件」を起こしてしまう．夜中3時ころからおなかの調子が悪くなり，ひどい悪寒もする．食中毒になったのだ．明け方が近づくにつれ，わたしの体調はいっそう悪化し，はげしい嘔吐を繰り返す．はじめは心配してくれていた滞在先の老女も，その姿をみて，「だれの家でなにを食べてきたんだ」と声を低くして問うのであった．朦朧とする頭のなかで，わたしはその日一日の行動を思い返す．

その日は村内にくらすフトゥの寡婦，アンナマリアの家に行っていた．彼女がモロコシ酒をつくるというので，みせてもらっていたのである．そのとき，醸造の工程でできるポリッジを飲み，さらに酵母菌（*urusemburo*）を，ほんのひと口なめさせてもらった．それは蜜のように甘くて，おいしいものだった．

食べた場所とものがわかって，老女は同居している男性に，村のモロコシからつくるポリッジが白人にとっていかによくないかを語りはじめた．そして，自分と親しいアンナマリアを十分に非難することができなかった老女は，食べたものの悪さを何度も強調して語った．

1度目の滞在のときにも，わたしは近所の家で昼食をもらって帰宅したことがあった．気前のいい笑顔を前にすれば，断われるはずもない．それに，ほかの家の食事にも興味があった．しかしその夜，わたしは老女から険しい顔で，「ほかの人の家では食事をしてはいけない」と注意された．体調を崩したわけではなかった．老女とひどく仲の悪い家というわけでもなかった．それでも，「ルワンダ人は悪い奴だから」と老女はつけくわえた．

数日後，体調を整えて村に戻ったわたしは，普段はきけないような話を耳にすることになった．まず，村の人びとのあいだでは，アンナマリアは魔女ではないか，という噂が飛び交った．わたしはこれをアンナマリア本人からきいた．自分が魔女だと疑われているが，彼らは間違っている，と．食中毒になったわたしを非難するような眼だったか，それとも外部者であるわたしに理解を求めるような眼だったか，わたしには判断がつかない．それでも彼女は静かに訴えた．

また，「ほかの人の家で食事をとってはならない」というわたしに対するかねてからの制約は，余計につよいものとなった．その言葉はもはや，わたしの滞在先の老女だけが語るものではなく，周辺にくらす人たちまでも

が口にするようになっていた．そしてみな同じようにいうのだった，「ルワンダ人は悪い奴だから」と．

さらに，いつものようにトゥワのシャンターリの家に行ったときのこと．シャンターリたちの耳にも，わたしが「死にそうになっていた」ことは耳に入っていた．心配と安堵の言葉を口々にかけてくれていた彼らは，つぎの瞬間，フトゥの人びとに対する日ごろの不満を吐露しはじめたのである．公共労働でつくられた集住村の家の土壁のできが粗雑であること．この村に引っ越してきてすでに2ヵ月以上が経つが，フトゥの奴らは一切ここを訪問しないこと．

そしてシャンターリとふたりきりになったとき，彼女はさらに激しい剣幕をみせて話を続けた．

「わたしの母親と娘，それに夫のキョウダイはフトゥに毒殺されたんだ．」

「紛争のときには，トゥチもトゥワも，フトゥの奴らにたくさん殺された．」

シャンターリたちは，わたしがフトゥの人びとに殺されそうになったと勘違いしていたのかもしれない．とにかく，わたしの引き起こした「事件」によって，フトゥやトゥワの人びとの集団内や集団間の力学の一端が，ほんのすこしわかった気がした．

トゥワとフトゥの人びとにかんしてこのように語れば，あたかも彼らのあいだには会話や挨拶すらおこなわれていないかのような印象を与えるかもしれない．しかしわたしが知る限り，彼らがつながるものがひとつある．壺である．壺は町の市場で売られるだけではなく，村内や近隣にくらす人であれば，必要なときにトゥワの人びとが届けに行く．彼らは壺を売る代わりに，そのときに必要とするマメやイモなどの食糧をフトゥの人びとからもらい受ける．

それに，壺が割れてしまう性質をもつことは，彼らの関係を成り立たせるうえで重要な要素でありそうだ．調理用なら 2，3ヵ月も使えば，壺は割れてしまうという．そうなれば再度，フトゥの人びとは壺を購入する必要があるし，トゥワの人びとはそこで現金や食料を得て，さらにはフトゥの人びとと対面する場をもつのである．

帰国の間際，シャンターリがわたしのためにと壺をつくってくれていた（写真 4）．それをみたフトゥの人びとは，「ユキコはそんなものを日本に持って帰るのかい」といいながらも，なぜかその顔には笑みを湛えているのであった．

村の人びとのもとには，今日もおなじだけ雨が降る．紛争の前にも，虐殺のただなかに

写真 4　壺をつくるシャンターリ
この壺は筆者の帰国時にプレゼントされた．

も，その直後にも，雨は降っていたのだろう．そしてトゥワの人びとは，今日も壺をつくるために陽がさしはじめるときを待っている．ひさしのもと，久しぶりに再会した友人との会話に華を咲かせるフトゥの人びとよりも，調査のゆく手を阻まれて，おもわず空を見上げてしまうわたしよりも，すこしばかり切実に．

生業は雨に依存する．生業を介した日常の邂逅や交渉もまた，雨に依存するだろう．それならば，彼らのあいだに存在する対立や牽制すら，ひとえに雨のせいにできればいいのに…．すすまない調査を雨のせいにしながら，いささか安直に，すこし恨めし気に考えてみる．

帰ってきたイモムシ

藤　岡　悠一郎 *

これは2006年に本誌に報告したフィールドワーク便り「オヴァンボの昆虫食と幻のおかず」［藤岡 2006］の後日談である．そこでは，私が調査を続けているナミビア共和国北部のオヴァンボ社会にみられる昆虫食について報告した．昆虫食とは，昆虫を食することにまつわる文化である．日本でもイナゴやハチノコをはじめ，ザザムシやカイコの幼虫，セミ，ゲンゴロウなど，地域によって異なる昆虫が食材として用いられ，現在でも一部の人々には根強い人気がある．近年では，2013年5月にローマで開催されたFAOの国際会議において，爆発的に増える人口を養う潜在的な食料源として昆虫が注目を浴びた．本稿では，前稿で「幻のおかず」として紹介した昆虫との念願の出会いをもとに，そんな昆虫食にまつわる，ちょっと驚いた経験を報告したい．

本稿の舞台となるナミビアは，国土のほぼすべてが乾燥気候下にあり，海岸沿いにナミブ砂漠が連なる乾燥国である．年間降水量が400 mm程度のサバンナに暮らすオヴァンボ人は，1年に1回やってくる雨季に農耕を営み，トウジンビエを育てて生計を立てている．彼らの日々の食事のなかで，昆虫は重要なおかずのひとつである．特に雨季に現れる数種類のイモムシたちは，肉や魚に勝るとも劣らないタンパク源だ．前稿でも紹介したモパネワーム（モパネという木の葉を食べるヤママユガ科の蛾の幼虫）は，プリプリ太っ

* 近畿大学農学部

写真 1 オカナンゴレ（*Coenobasis* sp.）

ていて食べごたえがあるため，日々のおかずの一品として重宝される．食べ方もさまざまで，乾燥させたものをそのまま食べたり，炒めたり，煮たり，スープにしたりと，おいしく食べようとする工夫がみられる．

さて，ここでお話ししたいのは，オカナンゴレ（*okanangole*）というイモムシである．オカナンゴレは，イラガ科のイモムシで，日本のイラガの幼虫に似た形をしている（写真 1）．体長は 3 cm くらいと小さく，背中側の体内に毒針をもっていて，強く押すと刺されてかゆくなる．いってみれば，ちょっとやっかいなケムシなのだ．しかしこれが意外なほどおいしく，村の人たちに「これが一番おいしいおかず」といわしめるほどの実力をもっている．しかし，私は 2002 年より毎年雨季には村を訪れているのだが，このイモムシに出会うことはまずなかった．また，村人に尋ねても 1990 年頃からまったく発生していないという．そのため，子どもたちのなかにはその姿をみたことがない者も多く，オカナンゴレの存在は昔話のように語られ，もはや忘れ去られかけていた．それがゆえに，私にとっても「幻のイモムシ」だった．

オカナンゴレの存在を知って以来，私はそのイモムシを一度食べてみたいという気持ちを強くもち続けていた．そこで，毎年村を訪れるたびに，調査の空き時間をみつけてはこの昆虫を探し続けた．探し回るうちに，稀ではあるが，木の枝についた成虫になる前の繭やイモムシに出会えたことがあった．しかし，それらの多くは蜂が寄生するなど，きちんと育っているものはほとんどみることができなかった．

そんなことが続くなか，2012 年から 2013 年の雨季に再びナミビアを訪れた．ナミビアでは 2007 年以降，異常に雨が多くなり，毎年のように洪水と大雨に関する国家非常事態宣言が発令されていた．村の畑も水に覆われ，トウジンビエにかなりの被害が生じ，村人たちは食料確保に苦労していた．ところが，この年の雨季は 1 月で雨がパタリと止まり，例年もっとも雨が多い 2 月から 3 月にほとんど雨が降らないという異常事態が発生した．この年もまた，人々は 1 年の食料を確保するのが大変になることが予想された．

2 月半ば，雨季なのにカラっと晴れたある日，私は村から 30 km ほど離れた町に車で買い物にでかけた．スーパーに寄った帰り道，日が傾くなか家路を急いでいると，道端のアカシアの木の傍でポツリポツリとおばさんたちが立って木を眺めていた．その日は「なんだろう」と思いつつ，特に気に留めなかったが，数日後，また同じように木の下で人々が何かしていた．気になって，二人連れのおばさんがいるところで車を止め，「何

をしているのか」と聞いてみると，「オカナンゴレがでた」というではないか（写真 2）．これまでずっと姿をみせなかったオカナンゴレが現れたとは信じられず，半信半疑でいると，ひとりのおばさんが自分の集めたオカナンゴレをみせてくれた．ビニール袋の半分に，数百匹くらいのイモムシが固まって蠢いている．確かにオカナンゴレだ．びっくりして木をみてみると，いるわいるわ，葉の上に乗ってムシャムシャ葉を食べているもの，枝をよじ登っているもの，じっとしているもの，点々とイモムシたちの姿が目に入った．オカナンゴレは緑色で，ところどころ青い斑点がある美しいイモムシだ．夕日のなかで，イモムシたちはひときわ輝いていた．一方で，彼女たちは黙々とイモムシを摘み取っては袋のなかに入れていく．背中を触ると棘に刺されるため，体の側面を指で軽くつまみ，ひょいと持ち上げて袋のなかに入れる．オカナンゴレの自慢の毒針は熟練のおばさんたちには通用しない．みるみるうちに袋いっぱいにオカナンゴレがたまり，彼女たちは揚々と引き上げていった．感慨に浸った私も車に乗って再び家路を急いだ．すると道中，夕陽の沈むサバンナを背景に，女性たちとオカナンゴレの攻防がいたるところで繰り広げられているのであった．

写真 2　オカナンゴレを採集しているおばさんたち
（2013 年 2 月 19 日撮影）

村に帰ったのち，オカナンゴレについて再び知り合いの人に聞いてみた．私がまず疑問に思ったのは，オカナンゴレは「幻のイモムシ」というよりも，そもそも数十年に 1 回くらい発生するような生き物だったのだろうか？ということである．しかし，その点はどうも曖昧であった．1990 年頃は毎年のように発生していたと話す人もいた．もし，数十年に 1 回しか発生しないのであれば，そのような記憶は鮮明に残ると思われるので，これほど長い間発生しないことはなかったのではないか．では，なぜ今日に至るまで，しばらくでてこなかったのだろうか？もっとも，生き物の世界には，13 年ゼミといわれるセミの大発生やフタバガキの一斉開花など，長い時間スケールのイベントというのは存在する．いや，むしろそうした周期のイベントは，人に知られていないものも含め，案外多いのかもしれない．

3 月になると村人たちのオカナンゴレ・フィーバーも終息し，平穏な日々に戻った．私は 3 月半ばに一度日本に戻り，4 月半ばに再びナミビアを訪れることとなった．結局，この年はナミビアにとって過去数十年でもっとも深刻な旱魃となった．降雨はすでに止まり，乾季の青い空が広がるなか，村に戻った．4 月 20 日のことである．例年ならば，2 m 以上の高さにまで育ったトウジンビエが広がり，人々が収穫で忙しくしている時期であるが，この年は小さく枯れてしまったトウ

ジンビエしかみあたらない．そんななか，いつもの知り合いの家にいくと，おばさんは留守にしていた．子どもに「どこにいったの？」と聞くと，「オカナンゴレを採りにいった」という．「えっ，もう終わっただろうに」と不思議に思ったが，夕方再びその家を訪ねてみると，おばさんがガラス瓶に詰まったまだ蠢いているたくさんのオカナンゴレをみせてくれた．

「イモムシたちが帰ってきたんだよ！」

おばさんは，どこかに出かけていたイモムシがまた村に帰ってきたような言い方をした．「そんなバカな．」このイモムシはそんなに大きくなる種でもないし，少なくとも前にいたときと同じイモムシたちが帰ってきたわけではあるまい．おそらく，2度目の発生があったのだろう．季節外れのイモムシの出現に，村は再び沸き立っていた（写真3）．

このオカナンゴレにまつわる出来事は，私が人々の生業を研究するうえで，生業のリズムは季節変動，年変動という思い込みをもっていたことを気づかせてくれた．もし，今年この地域を訪れていなければ，私にとってオカナンゴレは「幻のイモムシ」のままであったはずだ．自然災害もしかり，長い時間スケールのなかで発生し，地域に大きなインパクトを残し，少なからず人々の生活を変えていくものがある．イモムシの大発生は，そこまでのインパクトをこの地域にもたらしたとは思えないが，しかし，若者たちの脳裏に「オカナンゴレというイモムシがうまい（まずい？）」という忘れ得ぬ印象を植え付けたことは間違いないだろう．

写真3　再度現れたオカナンゴレを採集するおばさん
（2013年4月20日撮影）

それにしても，女性たちが嬉々として話す姿が忘れられない．なぜか，多くの人が，イモムシたちが「帰ってきた」という表現をした．これは，長い間みられなかったが久しぶりに発生したこと，また2回目の発生のときのこと，両方の場合で使われていた．今にして思えば，数年前に私が村人にオカナンゴレについて尋ねたとき，あるおじいさんが「オカナンゴレは旱魃のときに帰ってくる」と話していた．そのときはあまり実感がわかず，特に気に留めなかったことを恥じた．

長い間，待ちに待った気持ちが“おかえり”という気持ちになって現れたのだろうか．イモムシを手にもつおばさんたちの笑顔も数十年に1度というような満足げなものであった．

引　用　文　献

藤岡悠一郎．2006．「オヴァンボの昆虫食と幻のおかず」アジア・アフリカ地域研究 5(2): 262–266.